日本看護医療学会雑誌 *J. Jpn. Soc. Nurs. Health Care, Vol. 27, No. 1: 15–24, 2025*　　オンライン ISSN 2760-2079

総　説

看護師と重症心身障害児の社会的相互作用についての文献検討

後藤　雅子*

A Literature Review on Social Interactions between Nurses and Children with Severe Motor and Intellectual Disabilities

Masako GOTO
Kanagawa University of Human Services

Key Words：訪問看護，重症心身障害児，社会的相互作用，文献検討
nursing，children with severe motor and intellectual disabilities (SMID)，social interactions，literature review

要　旨

目的：看護師と重症心身障害児の社会的相互作用に関する既存研究を概観し、訪問看護師を含む看護師と重症心身障害児との社会的相互作用に関する有用な知見を得ることを目的とした。

方法：「重症心身障害」「相互作用 or コミュニケーション or 意思疎通」「看護 or 看護師」で検索した。該当文献は20件で、基本情報を概観し、研究目的、方法、結果を分類し、得られた知見を分析して社会的相互作用に関する示唆を検討した。

結果と考察：病院や施設では、相互作用により重症児の個別性や、意思を尊重した看護が行われ、看護師は重症児看護を通じて自己成長していることが示されていた。また、相互作用がケアの基本として示唆された。日常のかかわりの中で相互作用は自然に起こっていたが、訪問看護師を対象とした研究は1件のみであり、在宅で看護を提供する訪問看護も同じであるかは社会的環境の違いがあることから不明であり、さらなる検討が必要と考えられた。

Ⅰ．緒　言

重症心身障害児（以下、重症児とする）は、自らの意思を伝えても他者に理解されにくい場合がある。そのような特性を持つ重症児に対しても、看護師は意思疎通を図りながら看護ケアを実践していることは、多くの文献で報告されている（福山 他，2007；平野，2005；亀山，2009；望月 他，2004）。看護師と重症児が視線や身振り、会話を通して相互に影響を与え合い、その言葉や行動、意味が伝わることで、看護師と重症児との間に社会的相互作用が起こっている。

重症児のうち約7割が在宅で過ごしており（口分田，2022a）、今後も増加する可能性が高い。在宅で過ごす重症児は、病院や施設と異なり、24時間体制の看護を受けることはなく、訪問看護を利用しても週に数回程度に限られる。また、在宅環境では、高度な医療機器や専門スタッフが必ずしも揃っているわけではない。しかし、重症児が家族とともに過ごすことは、重症児に心理的安定をもたらし、家族にも精神的充足感をもたらすことが考えられる。さらに、地域社会から適切な支援を受けることで、家族の介護負担が軽減される可能性がある。また、重症児が個別的なケアを受けることにより、成長発達や生活の質の向上に寄与することが期待される。

訪問看護師は、時間的・空間的な制約がある状況下で、多様な表現を通じて意思を伝えようとする重症児とコミュニケーションを図り、関係を構築しながら看護を提供している。しかし、重症児の表現は微細かつ多様であり、訪問看護

*神奈川県立保健福祉大学

師を含む支援者が適切に認識し対応することが求められるものの、それは容易ではない。一方で、訪問看護師が実践する重症児との社会的相互作用は、円滑なコミュニケーションを促進し、在宅で過ごす重症児のニーズの理解を深め、看護の質の向上につながる可能性がある。著者は、訪問看護師と重症児の社会的相互作用に関心をもっている。しかし、訪問看護師を対象とした研究は限られており、先行研究の蓄積は十分とはいえない。そこで本研究では、研究対象を訪問看護師に限定せず、看護師と重症児の社会的相互作用に関する既存研究を概観することを目的とする。そのことによって、看護師さらには訪問看護師と重症児の社会的相互作用に関する有用な知見が得られると考える。

なお、本研究における「社会的相互作用」とは、Blumer（1969）やMead（1934）、Simmel（1923）、菅野（2003）の文献より「個人が他者と、まなざしや身振り、会話などを通してかかわりをもち、互いに関係を築き、言動やそれが含む意味を介して、互いに影響し合うこと」とする。新村（2018）によると「相互作用」は、「互いに働きかけること」や「二個または二個以上の事物・現象が相互に作用しあうこと。また、そこから何らかの結果を生じること」となり、本研究において明らかにしたい訪問看護師と重症児のやりとりから、どのような関係が築かれ、互いに影響し合うかということまでを示すには「相互作用」という用語より「社会的相互作用」が適切であると考えられたため、「社会的相互作用」を用いることとする。

Ⅱ．方　　法

1．対象論文の選定方法

文献の選定は2025年2月～3月に行い、検索期間を特に定めず、和文献と英文献を検索した。和文献は、医中誌WebとCiNiiを用いて、以下の検索式を設定した：「重症心身障害」AND「相互作用 OR コミュニケーション OR 意思疎通」AND「看護師 OR 看護」。「重症心身障害児」や「社会的相互作用」、「訪問看護師」では該当文献が抽出されなかったため、検索範囲を広げ、キーワードを設定した。社会的相互作用に関連する用語として「相互作用」、「コミュニケーション」、「意思疎通」を選択した。

英文献については、CINAHLとPubMedを用いて、和文献と同様の検索式を使用した。「重症心身障害」については日本重症心身障害学会の用語集を基に、以下の検索式を用いて検索を行った：（‘severe motor and intellectual disabilities’ OR ‘profound intellectual and multiple disabilities’）AND（‘interaction OR communication OR mutual understanding’）AND（nurse or nursing）。その結果、和文献420件、英文献21件が抽出され、引用文献からのハンドサーチ5件を加え、最終的に446件となった。重複文献23件を除外し423件が残った。423件の文献をタイトルと抄録から選択基準に照らして精査し、291件を除外し、132件が残った。その後、132件を精読し、除外基準に従って最終的に選定された文献は、和文献16件、英文献4件の計20件となった。（選定基準および除外基準など詳細は図1参照）。

2．文献検討の分析方法

まず、抽出された文献の発表年、著者、研究分野などの基本情報を概観した。次に、文献を精読し、各文献から研究の目的、研究方法、主な結果を抽出し、研究目的の類似性に基づいて分類した。さらに、主な結果の記述をもとに、看護師と重症児の社会的相互作用がどのように研究され、どのような示唆が得られたのかを検討した。

3．倫理的配慮

文献を取り扱う際には、著作権を侵害することがないよう配慮した。

Ⅲ．結　　果

1．文献の概要（表1）

文献の発表年に関して、最も古い文献は1995年（文献1）であり、次いで2004年（文献2）であった。2000年以前の文献は1件のみであり、2000年から2010年までに9件、2011年以降には10件が発表されている。2000年以降は、年ごとに0件から3件の範囲で継続的に発表されており、一定の頻度で文献が発表されていることが確認された。筆頭著者の所属は病院が10件、大学が8件、共同研究が2件であった。英語文献4件はすべて大学所属で、国籍は2件がアイルランド（文献4, 12）、1件がベルギー（文献11）、1件が日本（文献20）であった。

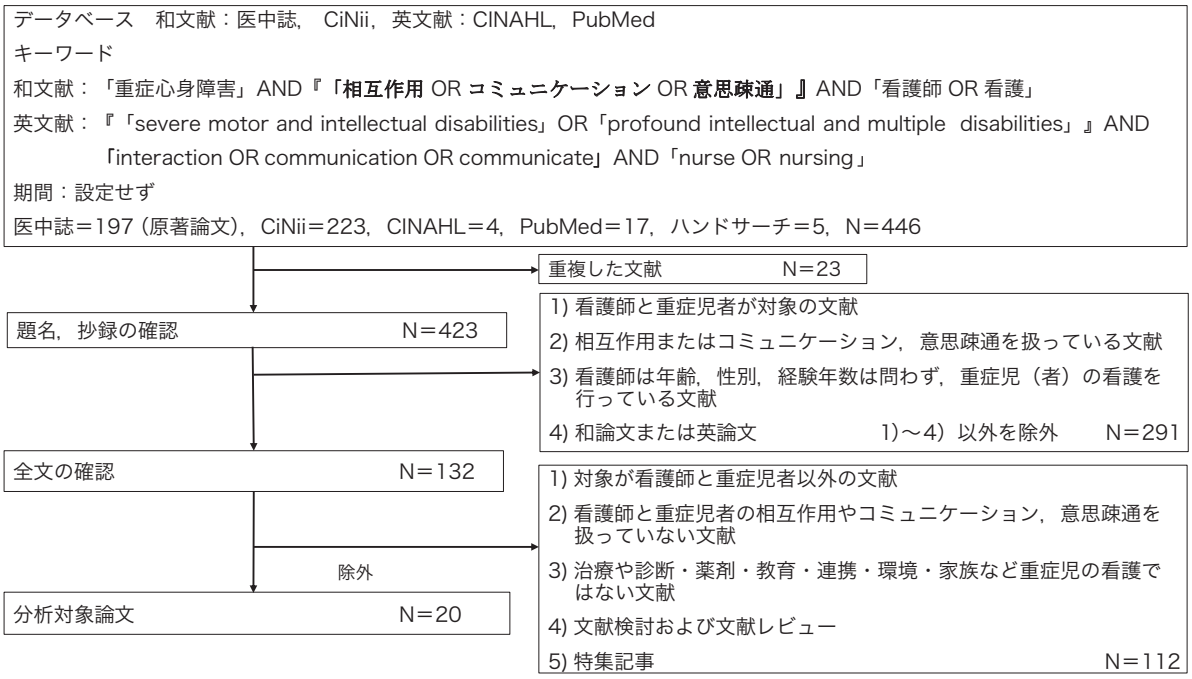

図1　文献検索の過程

文献掲載誌は学会・研究会誌が10件、学会論文集が5件、商業誌が3件、地方誌が2件で、学会誌の掲載が増加している傾向が見られた。商業誌に掲載された文献は2009年から2022年の間に3件あり、2件は英語文献であった。地方誌には2016年と2017年にそれぞれ1件ずつ掲載されていた。

研究対象については、20文献中19件が病院や施設での研究であった。対象者は看護師が10件、重症児が4件、看護師と障害者が3件、看護師と重症児およびその家族が1件、看護師または保育士と知的障害者が1件、重度の知的障害および多重障害のある患者とその家族・看護師・保育士・児童厚生員が1件であった。訪問看護師に焦点を当てた研究は1件（文献18）に限られた。研究デザインは質的研究が19件、量的研究が1件であった。質的研究では主に6～15名の看護師が対象となり、重症児は1～3名で実施されていた。量的研究では1325名の看護師を対象に質問紙調査を実施し、495名の回答が得られた。データ収集方法としては面接が最も多く13件を占め、その他には参加観察法4件（文献1, 2, 3, 20）、ビデオ等動画4件（文献4, 11, 12, 17）、再構成用紙1件（文献14）、看護記録1件（文献15）、ふり返り用紙（文献17）、質問紙1件（文献19）などが使用され、複数の方法を組み合わせた研究が6件あった。分析方法としてはカテゴリー分類が7件、その他にKJ法、民族看護学データ分析、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ、グラウンデッド・セオリー、トライアンギュレーション、記述統計が使用された。グラウンデッド・セオリーを用いた分析は1件（文献12）、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いたものは1件（文献6）、エスノグラフィーを用いたものは1件（文献20）であった。

2．文献の研究目的と結果

文献検討を行った20文献の研究目的は、重症児と看護師・介護者との相互作用における意思疎通の成立過程およびケア実践に関する要因の解明であった。研究目的は次の三つの要素に分けられる。第一に「ケア提供者の気づきを促す要因の探求」として、看護師が重症児との相互作用で「気づき」に関する因子を捉え、それが意思疎通にどのように影響を与えるかを明らかにする（文献1, 3, 5, 6, 11, 14, 20）。第二に「実践的なコミュニケーション手法の探求」として、非言語的コミュニケーションを使った相互作用の特徴と成立条件を整理する（文献2, 4, 7, 12, 15, 16）。第三に「ケアの意思決定に影響を与える要素の探求」として、看護師が重症児との関わりにおいて抱く思いややりがい、ケアに対する意義を検討する（文献8, 9, 10, 13, 17, 18, 19）。

表1 重症児者と看護師の社会的相互作用に関する研究の概要（1）

文献番号	筆頭著者，年，国	研究目的	研究対象者（支援者／ケア対象）	研究デザイン／データ収集方法／データ分析方法	主な結果	結果分類
1	笹岡，1995，日本	重症児と看護師の関わりのなかで気づきに関する因子と、その因子が組み合わされて気づきの過程が構成されているか明確にする	重症心身障害児病棟に勤務する看護師８名／重症心身障害児病棟に入所中の重症心身障害児分類によるⅠ型６名、Ⅲ型４名	質的研究／参加観察法とプロセスレコード、半構成面接／KJ法	気づきを構成する因子が６種類、サイン・意味の読みとり・知識・状況・看護者の行動・思いのくみとり。気づきのパターンが６種類、基本型・単純型・確認型・試行錯誤型・状況判断型・思いくみとり型がある	意思疎通の成立過程における看護師の気づきの発達
3	平野，2005，日本	脳障害のため意識や反応がない子どもを、看護師がどのように理解し関わっているのか明らかにする	子どもの担当看護師７名、担当以外で関わった看護師６名／小児外科病棟に入院している子ども４名とその親	質的研究／参加観察法と面接法／民族看護学データ分析	看護師は、アラームやわずかな変化を子どもの声として意味づけをしていくことで、生かされているのではなく生きている子どもとして、その子らしさを見出していく	
5	福山，工藤，谷野，2007，日本	意思疎通が困難な利用者の看護実践を評価する時、利用者との間のやりとりが、どのように行われているかを明らかにする	重症児施設に勤務している看護師６名／施設入所している重症児	質的研究／半構成面接／カテゴリーに分類	看護師の関わりとして、利用者のより多くの情報を探し求め、共に感じ共に楽しみ、常にポジショニングを考え、身体症状を意思表出と受け止める感性を持つやりとりを実践し、繰り返し行うことで、看護者側の一方的な働きかけでなく、受ける側の意思を尊重した質の高いケアの充実につながる	
6	市江，2008，日本	看護師の重症児者の反応を理解し意思疎通が可能となるプロセスを明らかにする	重症児施設の看護師15名／重症心身障害児施設に入所中の重症心身障害児者	質的研究／半構造化面接／修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ	看護師は反応のとらえ方に自信が持てない思いを抱きながら、日々の援助を考え、自分のなかで納得ができるように実際にかかわっていくことを繰り返すことで、反応が理解でき、意思疎通が可能となるプロセスになる	
11	Hostyn，2013，ベルギー	相互作用のダイアド（2者間の関係）に焦点を当て、相互作用の経験的知識も含めて記述する	直接支援看護師１名／PIMD当事者（16歳）：重度知的障害、右上下肢の麻痺、痙攣、筋緊張低下、変形を含む重度の運動機能障害	質的研究／ビデオと自由形式のインタビュー／ビデオ分析・観察評価尺度・インタビューデータによる三角測量	相互作用のパターンは看護師がクライアントに刺激的と考えられる活動を提供し、クライアントは警戒心があり、反応するものの、自発的な行動をとる機会が限られていた。看護師にとってオープンであることは相互作用の中で重要かつ不変の要素であった	
14	川本，2017，日本	児の反応が示す意味と、看護師の接し方の特徴を明らかにする	重症児を担当した看護師延べ34名／重症児１名（11歳）アテトーゼ型脳性麻痺IQ不明のため大島分類測定不能	質的研究／再構成用紙／カテゴリーに分類	児の反応は、視線・表情・声を出す・身体動作の4つが共通し、「感情の表出」「意思の表出」で構成された。看護師の接し方は「反応を読み取る」「選択を示す」であった	
20	Sato，2022，日本	当事者と介護者がどのようにコミュニケーションをとっているかを明らかにする	デイケアセンターの看護師・福祉職員（保育士・児童厚生員）／デイケアセンターの利用者であるPIMD患者とその家族	質的研究／エスノグラフィーの手法を用い参加観察法とインタビュー／オープンコーディングとフォーカスコーディングでテーマの特定	利用者とのコミュニケーションでは、利用者の微妙な反応を理解し、何が言いたいのか、何が必要なのかを理解し、それを言葉やケアで伝え返すという、この相互作用がケアの基本として重要である	

表1 重症児者と看護師の社会的相互作用に関する研究の概要（2）

文献番号	筆頭著者，年，国	研究目的	研究対象者（支援者／ケア対象）	研究デザイン／データ収集方法／データ分析方法	主な結果	結果分類
2	望月，2004，日本	児の発する声に相互作用を展開しコミュニケーション能力を伸ばすための療育者の関わりを明らかにする	受持ち療育者（看護師・支援課の職員）／施設入所中の重症児1名（5歳）：低酸素脳症後遺症、大島分類1	質的研究／参加観察法／児の発する声の意味を考える分析	関わりは、必ず呼名する・話しかける・タッチングをする・抱っこをする・排泄の有無をチェックする・おむつ交換をした。声を発しても関わりがもてない、遠くから声かけの時は声を発することを止めることもあった	個別ケアを通じた重症児の発達支援
4	Healy，2007，アイルランド	重度の知的障害を持ち、非言語的なコミュニケーションを用いる入所者を支援する看護師のコミュニケーション戦略を探ること	重度知的障害を持ち非言語的なコミュニケーション方法を用いる入所者を支援する看護師10名／施設入所している重度知的障害があり非言語でのコミュニケーションの利用者10名	質的研究／ビデオ録画と個人面接・フォーカスグループインタビュー／言語的・非言語的コミュニケーション行為の頻度を決定することと内容分析	看護師は、看護師の問題・コミュニケーションの環境・代替的な方法・個人の選択の4つが重要であると認識していた。言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションは同程度使用し、非言語的行為では「見る」が最も多く、言語行為では「質問」と「コメント」が多く、観察された相互作用でも同じであった。看護師は非言語的コミュニケーションをとる人々を社会的相互作用における対等なパートナー見ることが推奨される	
7	宮原，2009，日本	聴覚刺激を行い、心身の安定や感情表出の効果を検証する	病棟看護師／重症心身障害児2名（13歳副腎白質ジストロフィー大島分類1、16歳レット症候群大島分類5）	質的研究／把握表や観察表／表の把握と分析	聞き慣れた家族の声による聴覚刺激で快反応がみられた。患者一人ひとりに合ったコミュニケーションや刺激の方法を考え継続してかかわっていくことが大切である	
12	Griffiths，2016，アイルランド	「アチューニング（同調）」について述べることと、同調の概念を発展させるために用いられた質的方法論と解釈的枠組みを説明する	保育士1名と看護師1名／知的障害のある18歳の参加者1名（保育士）、知的障害のある26歳の参加者1名（看護師）の2組	質的研究／ビデオの記録（参加者の言語的・非言語的な行動を秒単位で記録）／グラウンデッドセオリー	相互作用パターンは設定・存在・刺激・注意・行動・関与・同調の7つの概念で構成され、同調には、共感と協力という構成要素があり、相互作用のなかで急速に変化する。同じプロセスを使い互いに同調する能力をもつ	
15	濱田，2018，日本	異なる3事例のNICD（生活行動回復看護：Nursing to Independence for the Consciousness disorder and the Disusesyndrome patient）による介入の成果について検討すること	重症心身障害児施設の看護師／重症児（者）3名（12歳：てんかん、脳性麻痺、18歳：てんかん、精神発達遅滞、喘息、慢性呼吸不全、87歳：精神発達遅滞、アルツハイマー型認知症、廃用症候群）	質的研究／数量変化のデータの収集と看護記録から行動の変化を収集／時系列で変化を分析	生後より障害を抱えており身体機能の低下が多いため更なる生活の獲得を目指すには、時間をかけ根気強く介入を継続することで生活の維持・向上が望める。発達の順序性を必ずしもたどらず可能なところから向上するという現象が見られた。大幅な発達の遅れがあろうとも、発達段階の向上の可能性がある	
16	徳島，2018，日本	個別性に応じた看護ケアについて明らかにする	周産期総合母子センター看護師6名と重症児専門療育センター看護師5名／入院または入所中の重症児	質的研究／半構造化面接／カテゴリーに分類	重症児の個別性に応じた看護ケアは、快適な状態を保つケア・合併症状に応じたケア・事故の出現を予測したケア・感情を読み取って応じるケア・発達を促すケアがあった	

表1　重症児者と看護師の社会的相互作用に関する研究の概要（3）

文献番号	筆頭著者，年，国	研究目的	研究対象者（支援者／ケア対象）	研究デザイン／データ収集方法／データ分析方法	主な結果	結果分類
8	福山，2009，日本	看護師が重症児との関わりをどのような思いで行っているのかを明らかにする	重症児施設看護師６名／重症児	質的研究／半構成面接／カテゴリーに分類	看護師は、意思疎通が困難な重症児とのケアを通じて、苦手意識、意思の伝達が成立した喜び、看護実践への意欲を感じている	看護師の経験を通じた専門性の深化
9	亀山，2009，日本	看護師が障害のある子どもの意思の表出を、どのように受け止めているのかを明らかにする	小児病棟看護師５名と肢体不自由児施設の病棟看護師４名／障害のある子ども	質的研究／半構成的インタビュー／カテゴリーに分類	看護師は、日常的な臨床場面の中で生じるストレスの多い出来事に対する反応を障害のある子どもの意思の表出と受け止めていた	
10	木村，2010，日本	看護師の利用者へのケア提供に対するやりがいを明らかにする	重症心身障害児（者）施設に従事する看護師11名／重症心身障害児（者）	質的研究／半構成的面接面接法／カテゴリーに分類	個別的な関わりの難しさゆえに反応がみられたことや訴えがわかった時の喜びは大きく、その喜びがやりがいに繋がっていた	
13	谷藤，2016，日本	医療的ケアの高い重症心身障害児（者）と関わる看護師が抱く思いを明らかにする	病棟で勤務する看護師９名／医療的ケアの高い重症児	質的研究／面接によるインタビュー／カテゴリーに分類	コミュニケーションや観察・患者さんの気持ちをくみ取る事の難しさを感じつつ、患者の反応を捉えやりがいやさらに学びたい、看護をより深めたいという気持ちを抱いていた	
17	是澤，2017，日本	患者の反応をどう捉え判断して援助しているかを明らかにする	病棟で勤務する新人看護師１名 熟練看護師１名の計２名／対象重症者１名（50歳代）脳性麻痺による筋緊張の亢進	質的研究／ふり返り用紙と動画・面接／考え方と関わりの違いや共通することについての分析	それぞれ共通の認識はできているが、新人看護師は患者の変化に応じた援助方法を見出すことが難しく、熟練看護師は、本人の状態をアセスメントし、その状況にあったケアを提供しながら観察を続け対応していた	
18	大北，2019，日本	在宅療養中の重症児をケアする際に抱く訪問看護師の思いを明らかにする	重症児（大島分類１～４）の訪問看護ステーションに所属する訪問看護師８名／訪問看護を受けている重症児	質的研究／半構造化面接／KJ法	子どもを喜ばせたい・潜在する能力を信じるが、ケアに自信が持てず、プロなのに情けないと感じ、他者に依存したくなっていた。子どもは理解されにくい存在であり、単調さと痛みに縛られた存在と捉え、専門性を発揮したいと願い、母からの情報を活かし、想像力を駆使してケアを行っていた	
19	滝澤，2021，日本	看護師の共感の程度とその関連要因を共感援助尺度を使用し明らかにする	重症児（者）施設に勤務する看護師1325名に質問紙配布し495名の回答／重症児（者）	量的研究／質問紙／記述統計・２変量解析・重回帰分析	共感の高い看護師ほど重症児者の主観的な訴えを重視し変化を感じとる姿勢が看護師と家族の相互作用を促進し頼られる要因となる	

「研究結果」としては、看護師が重症児との関わりで非言語的コミュニケーションを駆使し、個別対応することで質の高いケアを提供できることが明らかとなった。また、看護師の専門性と成長がケアの質向上や患者・家族との信頼関係に寄与することも確認された。これらの研究結果は、研究目的で設定した三つの要素に対応しており、それぞれ以下の三点に分類できる。第一に「意思疎通の成立過程における看護師の気づきの発達」として、看護師は重症児の非言語的反応を通じて意思疎通を図り、重症児との相互作用により適切なケアを提供する（文献1, 3, 5, 6, 11, 14, 20）。第二に「個別ケアを通じた重症児の発達支援」として、個別のケアを通じた相互作用が重症児の発達を支援することが示された（文献2, 4, 7, 12, 15, 16）。第三に「看護師の経験を通じた専門性の深化」として、相互作用の中で得られる経験を通じて最適なケア方法を見出し、ケアの質向上と信頼関係の深化に繋がることが確認された（文献8, 9, 10, 13, 17, 18, 19）。

3．訪問看護師と重症心身障害児の社会的相互作用に関する研究

在宅療養を行う重症児は増加しているが、訪問看護師に関する研究報告は1件（文献18）のみであった。この研究の目的は、在宅療養中の重症児をケアする訪問看護師の思いを明らかにすることである。訪問看護師8名を対象に半構造化面接調査を実施し、得られたデータはKJ法で分析され、10の象徴的概念に統合された。

社会的相互作用に関連する記述として、10の概念の1つ【喜ばせたい】において、訪問看護師は子どもの快のサイン（例：口をもぐもぐ動かす、穏やかな表情）を理解し、これに喜びを感じ、関わり方を工夫していたことが示された。このやり取りを通じて、訪問看護師は子どもから影響を受けているという社会的相互作用が確認された。しかし、関わり方の具体的な工夫については明示されていなかった。

4．重症児と看護師の社会的相互作用に関する英論文の研究状況

文献検索の結果、重症児に関する和文献は多く見られたが、英文献は4件にとどまった。英語文献が少ない理由として、重症児という概念が日本の法制度に基づくものであり（口分田, 2022b）、海外ではこのような枠組みで障害児を包括的に捉えることが一般的ではない点が挙げられる。また、海外では疾患や障害ごとに個別の研究が行われており、「重症児」やそれに相当する語で検索しても該当する文献が見つかりにくい可能性がある。しかし、支援の必要性に関しては共通の認識があり、海外においても個別のニーズに応じた支援や研究が進められている。

4件の英論文のうち、3件は海外における重症児への看護に関する研究であり、国別ではアイルランドが2件（文献4, 12）、ベルギーが1件（文献11）、日本が1件（文献20）であった。海外の研究は、いずれも重症児と看護師の1対1の看護場面をビデオ録画し、インタビューや映像分析を通じて相互作用を検討したものであった。対象者には重症児のほか、重度の知的障害者や視覚障害、聴覚障害、身体障害を持つ者も含まれており、年齢は16歳から26歳であった。日本の英文献は1件のみで、重症児と看護師との社会的相互作用に関する研究であった。この研究は施設での実践を対象にしており、参加観察法とインタビューで行われ、映像分析は実施されていなかった。

Ⅳ．考　　察

1．重症児とのかかわりにみる看護師の社会的相互作用の実践とその意義

本研究では、20件の既存研究を基に、看護師と重症児との社会的相互作用に関する先行研究の動向を整理した。その結果、2000年以降は継続的に文献が発表されており、関心が持続している分野である。重症児の増加が予測される中で、今後さらに研究の必要性が高まると考えられる。しかし、在宅での重症児に関する研究は少なく、主に病院や施設を対象とした研究が多数を占めていた。このことから、在宅看護に関する研究の進展が求められることが明らかとなった。

研究目的は、「ケア提供者の気づきを促す要因の探求」、「実践的なコミュニケーション手法の探求」、「ケアの意思決定に影響を与える要素の探求」の三つに分類された。研究結果は、「意思疎通の成立過程における看護師の気づきの発達」、「個別ケアを通じた重症児の発達支援」、「看護師の経験を通じた専門性の深化」の三つに整理された。

この研究目的と結果について、関連性が明確に示されており、例えば、「ケア提供者の気づきを促す要因の探求」を目的とした研究は、「意思疎通の成立過程における看護師の気づきの発達」に関連していた。このことは、看護師が重症児との相互作用を通じて、意思疎通を図り、その過程で気づきを得ていることを示唆している。また、「実践的なコミュニケーション手法の探求」を目的とした研究は、「個別ケアを通じた重症児の発達支援」に関連しており、非言語的なコミュニケーション手法が、個別のケアを通じて重症児の発達支援に寄与していることが示されている。「ケアの意思決定に影響を与える要素の探求」に関する研究は、「看護師の経験を通じた専門性の深化」に関連しており、ケア提供者である看護師の意識が看護師の成長ややりがいに繋がることが明らかとなった。これらの結果は、いずれも研究目的と密接に関連しており、相互作用の質を向上させる要因を理解するための重要な示唆を与えている。

また、上記で整理した一連の研究成果は、看護における社会的相互作用の意義を明確にするものである。菅野（2003）は、社会的相互作用を人と人との関係構築のプロセスと捉えており、この視点は看護実践にも通じると考えられる。Orem（2001）、Peplau（1952）、Travelbee（1971）もまた、社会的相互作用がケアの基盤であり、対象者との信頼関係を築く上で重要な要素であると述べている。看護においては、社会的相互作用を通じて対象者の理解を深め、ニーズに応じた質の高いケアを提供することが求められる。看護師が重症児のニーズを的確にとらえ、信頼関係を構築し、その成長や健康を促進していくためには、社会的相互作用が果たす役割が極めて大きいといえる。

２．訪問看護師と重症心身障害児の社会的相互作用を解明する必要性

本研究の文献検討では、訪問看護師に関する文献が1件のみであり、看護師と重症児との社会的相互作用について広く検討したにとどまった。しかし、訪問看護師と重症児との相互作用を明らかにすることは、訪問看護師が重症児のニーズを把握し、成長発達に即した看護を提供するために不可欠である。滝澤ら（2021）の研究では、看護師の共感姿勢が家族との相互作用を促進し、家族から頼りにされる要因となった。また、訪問看護師の支援が家族の負担を軽減し、他者に頼る機会を提供する可能性が示唆されている。島田（2024）は、家族が子どもに対して24時間ケアを行うことが無理であり、訪問看護師による支援が家族にとって重要であることを指摘している。

さらに、重症児にとって訪問看護師の存在は、身体的、心理的、精神的、社会的な発達に影響を与える重要な要素であり、訪問看護の役割には発達支援も含まれている（田中，2022；小川，2021）。現在、訪問看護師と重症児との社会的相互作用のプロセスは明らかになっていないが、文献検討により、看護師のケアにはすでに社会的相互作用が組み込まれており、重症児との関わりの中で自然に行われていることが示唆された。Travelbee（1971）は、「人間対人間の関係は偶然に起こるものではなく、看護師が病人やその他の人々と相互作用を行う中で日々築かれるものである」と述べており、社会的相互作用は日常の関わりを通じて築かれ、社会の構築に繋がることが示されている。このため、訪問看護師と重症児との社会的相互作用を明らかにすることは、重症児とその家族が地域社会で生活するために重要な視点である。

３．社会的相互作用を研究するための方法論の検討

本研究の文献検討では、20件中4件がビデオなどの映像資料を用い、録画場面から看護師と重症児の相互作用を分析していた。市江（2008）は、看護師への回顧的インタビューでは記憶の曖昧さが生じる可能性を指摘しており、観察によるデータの重要性が示唆された。英文献4件のうち3件はビデオによるデータ収集を行っており、そのうち2件は録画映像を視聴した上でインタビューを実施していた。ビデオ録画の活用により、リアルタイムに近いデータが得られる利点がある。一方で、録画には倫理的配慮や同意取得の困難さ、撮影機材の準備、日程調整など、実務的な課題が多くともなう。

O' Toole *et al.*（1989）によるとPeplauは、相互作用は変化が速く観察は容易でないが、それを理解し、解釈する力は看護実践に不可欠であると述べている。また、Peplau（1952）も

また、相互作用の複雑さを踏まえ、観察の単位を明示することの重要性を指摘している。看護場面における相互作用の実際を捉えるには、看護師がどのように反応し、理解し、関係を築いているかを明らかにする必要がある。そのため、ビデオを用いた観察および再生インタビューは、有効な研究手法の一つと考えられる。ただし、その活用に際しては、倫理的・実務的課題にも十分配慮する必要がある。以上のことから、看護師と重症児の社会的相互作用を明らかにするためには、手法の工夫と慎重な設計が求められる。

Ⅴ．結　　語

今回の文献検討により、看護師と重症児の社会的相互作用においては、看護師が非言語的コミュニケーションを通して子どもの反応を丁寧に捉え、個別的なケアを行っていることが明らかになった。これにより意思疎通が図られ、ケアの質や信頼関係が深まることが示されていた。また、こうした関わりを通して、看護師自身の専門性も深化していくことが示唆された。

一方で、訪問看護師と重症児との社会的相互作用についての文献は少なかった。今回の文献検討では20件中19件が施設や病院における看護を対象としていた。そのため、在宅での看護師と重症児との社会的相互作用についても同様のことがいえるかは不明である。看護において社会的相互作用を重視し扱うことは、対象者への理解を深め、対象者のニーズを満たし、看護の質を高めるために必要不可欠であると考えられる。したがって、訪問看護師と重症児との在宅における社会的相互作用についての研究が求められる。

謝　　辞

本研究にご指導いただいた福島道子先生に厚く御礼申し上げます。本研究は神奈川県立保健福祉大学学内研究助成を受けたものである。本研究は湘南鎌倉医療大学大学院博士後期課程における研究の一部である。本論文は第49回日本重症心身障害学会学術集会にて発表した内容を加筆・修正したものである。本論文内容に関する利益相反事項はない。

Ⅵ．文　　献

Blumer H.G. (1969)／後藤将之 訳（1991）：シンボリック相互作用論　パースペクティブと方法，10, 12, 97-98，勁草書房，東京.

福山真奈美，工藤靖子，谷野町子，他（2007）：意思疎通が困難な重症心身障害児（者）に対する看護師の関わりについて，日本看護学会論文集小児看護，38, 149-151.

福山真奈美，工藤靖子（2009）：意思疎通が困難な重症心身障がい児（者）のケアに携わる看護師が抱く思い，日本看護学会論文集小児看護，40, 51-53.

Griffiths C., Smith M.(2016): Attuning: A Communication Process between People with Severe and Profound Intellectual Disability and Their Interaction Partners, Journal of Applied Research in Intellectual Disabilities, 29, 124-138.

濱田崇宏，福良　薫（2018）：重症心身障害児（者）へのNICD介入の効果，日本ヒューマン・ナーシング研究学会誌，6(2), 1-6.

Healy D., Walsh P.N.(2007): Communication among nurses and adults with severe and profound intellectual disabilities: predicted and observed strategies, Journal of Intellectual Disabilities, 11(2), 127-141.

平野美幸（2005）：人工呼吸器を装着し，脳障害のため意識も反応もない子どもへの看護師の関わり ―‘子どもの声’を聞き分ける―，日本看護科学会誌，25(4), 13-21.

Hostyn I., Maes B.(2013): Interaction with a person with profound intellectual and multiple disabilities: A case study in dialogue with an experienced staff member, Journal of Intellectual & Developmental Disability, 38(3), 189–204.

市江和子（2008）：重症心身障害児施設に勤務する看護師の重症心身障害児・者の反応を理解し意思疎通が可能となるプロセス，日本看護研究学会雑誌，31(1), 83-90.

亀山千里（2009）：重度・重複障害のある子どもの意思の表出に対する看護師の受け止め方，日本看護学会論文集小児看護，40, 42-44.

川本英津子，万波知佳，樽谷八千代，他（2017）：重症心身障害児が示すコミュニケーション反応の明確化と接し方の特徴　意思表出が困難な患児の看護場面の再構成から，鳥取臨床科学研究会誌，8(2), 109-116.

木村美香，茂木幸子，斉木栄子（2010）：重症心身障害児（者）施設で働く看護師のケア提供に対するやりがい，日本看護学会論文集小児看護，41, 158-161.

是澤正晴，森井千鶴栄，岡田雅人，他（2017）：重症心身障害者の食事援助における看護師の思考と関わり～新人看護師と熟練看護師を比較して～，鳥取臨床科学，9(1), 24-31.

口分田政夫（2022a）：理事長挨拶，日本重症心身障害学会，https://www.js-smid.org/about/message/（最終閲覧日：2025年1月19日）.

口分田政夫（2022b）：重症心身障害・医療的ケア児者の概念と定義の歴史的変遷と現在の定義，重症心身障害／医療的ケア児者　診断・看護実践マニュアル改訂 第2版（北住映二，他 編），2-9，医学書出版，東京.

Mead G.H. (1934)／山本雄二 訳（2021）．精神・自我・社会，142，みすず書房，東京.

宮原　希，小林恵子，春原亜矢，他（2009）：精神臨床看護検討レポート（case 8）リラックス効果のある音楽・家族の声による聴覚刺激　感情表出の乏しい患者に対するかかわり，臨床看護，35(13), 2078-2083.

望月　泉，北村愛子（2004）：重症心身障害児のコミュニケーション能力を伸ばすための一考察 ―児の発するサインに相互作用を展開して―，日本看護学会論文集小児看護，35, 86-88.

日本重症心身障害学会：用語集，https://js-smid.org/docs/J41_3_word.pdf （最終閲覧日：2024年11月29日）.

小川綾乃（2021）：第5章 5 子ども・障害をもつ子どもの看護，地域・在宅看護論（尾崎章子，他 編），244-252，医歯薬出版，東京.

大北真弓（2019）：重症心身障害児をケアする訪問看護師の思い，日本重症心身障害学会誌，44(3), 615-621.

Orem D.E. (2001)／小野寺杜紀 訳（2005）：オレム看護論―看護実践における基本概念（第4版），97-98, 医学書院，東京.

O'Toole A.W., Welt S.R. 編 (1989)／池田明子, 小口　徹, 川口優子, 他 訳（1996）：17 専門的な接近, ペプロウ看護論　看護実践における対人関係論，200，医学書院，東京.

Peplau H.E. (1952)／稲田八重子，小林冨美江，武山満智子，他 訳（1973）：ペプロウ人間関係の看護論，284-285，297-298，301，医学書院，東京.

Sato T. (2022): Creation of Care Through Communication by Nurses, Welfare Workers, and Persons (Children) With Profound Intellectual Multiple Disabilities at a Day Care Center, Emancipation From the Japanese "Shame Culture", Advances in Nursing Science, 45(2), E69-E93.

笹岡千枝，田辺亜紀子，勇　真紀，他（1995）：重症心身障害児（者）の欲求表現に関する看護者の気づき食事・排泄・睡眠の場面を通して，重症心身障害研究会誌，20(1), 89-94.

島田珠美（2024）：Ⅱ章 7 疾病や障害を有する小児への在宅看護，看護学テキストNICE地域・在宅看護論Ⅱ　支援編（改訂 第3版）（石垣和子, 上野まり, 徳田真由美，他 編），169-176，南江堂，東京.

新村　出（2018）：広辞苑　第七版，1686，岩波書店，東京.

Simmel G. (1923)／居安　正 訳（1994）：社会学（上），50，白泉社，東京.

菅野　仁（2003）：ジンメル・つながりの哲学，32，NHKブックス，東京.

滝澤幸子，冨田幸江，小林由起子（2021）：重症心身障害児（者）に対する看護師の共感の程度とその関連要因，日本健康医学会雑誌，30(1), 32-44.

田中道子（2022）：6章 5 在宅療養児と家族のくらしを支える，家族看護学を基盤とした地域・在宅看護論 第6版（渡辺裕子 監），313-330，日本看護協会出版会，東京.

谷藤晴香，山下友美，宮川めぐみ，他（2016）：医療的ケアの高い重症心身障害児（者）と関わる看護師が抱く思い，国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター医学雑誌，3(1), 72-76.

徳島佐由美（2018）：経験豊富な看護師による重症心身障害児の個別性に応じた看護ケア，日本重症心身障害学会誌，43(3), 531-536.

Travelbee J. (1971)／長谷川浩，藤枝知子 訳（1974）：トラベルビー　人間対人間の看護，173-174，医学書院，東京.

受付日：2024年12月26日
採択日：2025年 5 月23日